

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00627

研究課題名（和文）近世節用集の基礎情報総合事典のための基礎調査と資料収集

研究課題名（英文）Basic research and collection of materials for a comprehensive encyclopedia of basic information on early modern Setsuyoshu

研究代表者

佐藤 貴裕（Sato, Takahiro）

岐阜大学・教育学部・教授

研究者番号：00196247

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）： コロナ禍が続く時期であったため、情報収集のキーであった臨地調査が十分にはできなかった。これに代わって、蓄積済みの情報を公開するため、論文執筆を積極的に行った。また、大正期の節用集観を反映する上司小剣『紫合村』ほかをHP上にて公開した。さらに、新たな視点として、近世節用集に取って代わった辞書群に注目することができた。

資料収集は、未知の資料や学術的価値の高いものをはじめ60点以上にのぼった。ここには、近代実用辞書（ペン字・対訳英語併記の簡易国語辞書）約30点を含んでいる。

以上、本研究計画によって、近世節用集関連資料の充実とともに、近代実用辞書研究への基礎を確立することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究が目指すのは、節用集とは何物であるかを提示するための、さまざまな情報の収集と新たな手法の開拓であり、それらからなるより深いレベルでの記述的研究である。

近世節用集は、隣接諸分野の研究者からも、近世の文化状況を端的に知るためのツールとして着目されている。したがって、節用集が何物であるかを改めて示す責任が、辞書史学を擁する国語学・日本語学の側にはあるものと考えている。その責の一端を果たすのが本研究計画である。

近世・近代に生きる人々が節用集などと触れ合うことで基礎的教養・文化的素養を育んだであろうが、それはそのまま、近代国家・国民国家の形成への関わり方を示す部分を含むものとなっている。

研究成果の概要（英文）： Due to the ongoing COVID-19 pandemic, we were unable to conduct sufficient on-site surveys, which were key for information gathering. In response to this, we actively wrote papers to share accumulated information. Additionally, we published resources such as Kamitsukasa Shoken's "Yuda Village" on our website, reflecting the practical collections of the Taisho era. Moreover, we were able to shift our focus to the dictionaries that replaced Setsuyoshus in the early modern period.

We collected over 60 materials, including unknown documents and those of high academic value. Among these were approximately 30 modern practical dictionaries (simple Japanese dictionaries with penmanship and English translations).

As a result of this research plan, we were able to enrich the resources related to early modern practical collections and establish a foundation for research on modern practical dictionaries.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語史 辞書史 語彙史 出版史

### 1. 研究開始当初の背景

室町時代に誕生した節用集は、江戸時代には営利出版業の商品として差別化を受け、多様な日用教養記事を付録されていった。このため、単なる辞書から、近世・近代の日本(人)を形成したメディアへと変容したため、人文史学の諸分野から注目されつつある。しかし、近世的版權(板株)への顧慮のない論考もまま見られる。一方、日本語史研究では、節用集をはじめとする江戸時代の通俗辞書については理解・知見の蓄積が十分とはいえない状況がある。そこで、節用集に関する諸情報を的確に発信するツールを提供する必要があると考え、基礎的情報の収集・蓄積・発信を企図するにいたった。

### 2. 研究の目的

昨今、人文史学の諸分野から近世節用集が注目されている。単なる辞書・用字集というだけでなく、多彩な日用教養記事の付録により生活規範・歴史認識・社会構造を伝えるメディアとなっており、近世・近代の日本社会を築いた重要なツールとして注目しつつあるからである。しかしながら、近世的版權(板株)への顧慮がないままに立論するなどの例も散見されるところである。

一方、日本語史研究においても、江戸時代の民間に用いられた節用集をはじめとする通俗辞書については顧慮することが少なく、江戸時代の言語生活史の記述・描出に説得力を欠く論述がまま見られるところである。

こうした状況に鑑み、節用集にかかわる各種情報を的確に発信するツールを提供する必要があると考えるにいたった。本研究計画は、そのための基礎的情報の収集・蓄積・試行的発信を行うものである。

### 3. 研究の方法

(1)方針 申請者がこれまで行ってきた、近世節用集の所在調査・書誌調査・資料撮影・原本資料収集を引き続き行っていく。これまでは、所蔵数の比較的多い図書館などの集中する関東・関西・瀬戸内地方を中心に行ってきたが、これ以外の地域においても、図書館だけでなく近年整備されつつある(公)文書館・郷土資料館などにも範囲を広げることにより、節用集現存諸本の見落としをかぎりになく小さくすることを予定している。

(2)調査内容 書誌的な判型・丁数・発行書肆・刊行年などをはじめ、国語学的・辞書史的に必要な検索法・語彙・系統の闡明に資する内容を対象とする。また、言語生活史的観点からも調査項目を加えたい。これは、書き入れ・落書き・署名など、利用様態を直接に知らせる事項について情報を収集するものである。文書館などの家ごとの目録類も注意すべきで、そこには旧蔵者の人となり・家風などが記されているのが普通であって、言語生活史研究にとって具体的な検討材料を提供しうる。許される範囲で原本の全冊撮影に取り組み、調査後の検証、調査漏れのカバーとする。

(3)原本の収集 原本の購入も古書店・展示即売会・通信販売・ネットオークションなどを最大限に活用して積極的に行うこととする。図書館・文書館・歴史資料館等での調査を予定しているが、そうした場では、状態のよい美品を収蔵する傾向がある。保存状態の良否と、辞書史的価値は比例するものではないので、原本の購入を積極的に進める必要がある。

(4)成果公開 4年の研究計画期間内であっても、一定の成果を得られた場合には、逐次論文化することにより、成果の社会的還元を速やかに行うこととする。また、論文化になじまない資料公開・書誌情報公開などは、申請者のホームページ(近世節用集事典(稿))  
<https://www1.gifu-u.ac.jp/~satopy/kkn1619.htm>)において適宜公開していくこととする。

### 4. 研究成果

(1)2020年度 COVID-19感染症拡大により節用集諸本の各所蔵機関等への実地調査を行なうことができないため、必要なデータの集積が芳しくないが、これまでの調査結果を公開することに軸足を移すことで、所期の成果と同等の成果をあげつつある。原本収集についてもほぼ同様に低調である。これまで数々の節用集原本を収集する契機となった古書即売会などは、やはりCOVID-19感染症の拡大のため、開催がとりやめられたためである。ただし、質的・内容的には興味深いものを得ることができた。17・18世紀刊行書各1件、19世紀刊行書5件にとどまるが、『増補数引』いろは節用集』『大全早字引節用集』はともに薄葉刷り、『増補改正』早引節用集』は既存本に比定できない新出本と見られ、『永代節用無尽蔵』(天保2年刊)は本願寺寄りの改刻が見られる異版本であった。文献調査では、想定外の成果があった。上司小剣(1874~1947)の小説『紫合村』に行きあたることのできたのである。この作品では「節用集」と綽名される人物が登場するが、彼の行為・主張を解明することで、大正期における節用集受容研究のための新たなアプローチ、ことに、単に現存諸本の調査による情報収集では到底得られない、「節用集観念」とでも呼ぶべきものに接近できる糸口を得たものと考えている。

成果公開としては、これまでの諸本調査の結果については、逐次「近世節用集事典」(<https://www1.gifu-u.ac.jp/~satopy/kkn1619.htm>)にて公開中である。また、小剣『紫合村』全文を掲載することで、多くの研究者の活用を準備した。

(2)2021年度 主たる研究活動となる図書館・文書館・歴史民俗資料館等での節用集諸本の調査は、COVID-19 感染症の流行のため、自粛を余儀なくされている。この方面での調査計画は停滞をきたした。が、各機関による古典籍のデジタル化事業の進捗により一定の調査はできている。資料収集においては、この図書館等での調査を補ってあまりある、想定外の成果を得たと考える。まず、17世紀の節用集では、『真草二行節用集』(万治2年刊)・『二行節用集』(延宝頃。既存本に比定できず。新出か)・『頭書増補節用集大全』(元禄6年か。既存本に比定できず。新出か)の3点があった。18世紀諸本では『永代節用大全無尽蔵』(寛延2年。新出か)・『万代節用字林蔵』(希少な安永頃版か)ほか2点を得た。19世紀諸本では『大万宝節用集字海大成』(文化11年の他書合冊版)・『早引節用集』(嘉永3年、希少)・『(世用万倍)早引大節用集』(明治刷りか)・『大全早引節用集』(嘉永7年。料紙異色混成)など特徴的な諸本を入手した。写本では久保田善次郎写『早引節用集』(天保10年)をえた。奥付によれば善次郎は15歳であり、この年齢から寺子屋の卒業記念の全編書写と推定されるものである。その底本の特定および書写態度の追究、そこからする近世教育・教養の有りようによりうる好個の資料である。資料公開は、徳永直『他人の中』(抜粋)、上田万年「(講演)大戦後の東洋に於ける国語問題」を加えることができた。

(3)2022年度 コロナ禍は終息傾向を呈しつつあるが、他地での調査を実施することは自粛すべきと考えたため、実地調査による成果はほぼ存しない。一方で、新たな視点を獲得することができた。i) 節用集史の完全な記述を目指すとするれば、その終末期での出版・社会・受容などでの様相を記述する必要があると考えるにいたったということがある。ii) 裏返しの問題意識として、節用集に取って代わった辞書群を特定するという形でもなしうることも考えられた。そこで、節用集終末期の諸相を記述するとともに、節用集を代替したとおぼしい実用辞書(歴史的仮名遣ではなく発音準拠の五十音順に配列し、簡易な語釈と対訳英語・ペン字書体を併示する簡易国語辞書)に注目するにいたった。iii) これまで他分野の範疇になることとして付録への検討を控えてきたが、隣接分野における付録地図の扱いについて検証を加えることとした。資料収集では、古書即売会などは集会の制限の緩和や屋外での開催もあることから一定量の購入を行うことができた。実用辞書の購入も30冊におよんだ。成果公開としては、実用辞書の初期の様相をおおよそ描き出した論考1本と昭和期の実用辞書リスト(約200本所掲)を示した。また、節用集史終末期の諸相を描き出すとの視点から、昭和戦後以降にもいまだ散見される節用集への言及(回顧・文化史的記載・参考的利用など)を掬い取ることができた。

(4)2023年度 コロナウィルスの感染拡大が小康を迎えており、本研究計画の一つの柱である臨地調査を実施した。佐賀大学附属図書館(節用集関連資料として国華集(寛永5年刊)・仄韻略(寛永8年刊別版)・古今雑事集篇(写本)の閲覧・撮影)・ゼンリンミュージアム(『倭節用集悉改囊』所掲日本図の原図および関連資料閲覧)・国文学研究資料館(マイクロ資料による『大日本永代節用無尽蔵』『倭節用集悉改囊』等の版種調査)などを行った。一方、もう一つの柱である江戸時代の辞書資料の購入については、感染の可能性の低い屋外で開催される古書市、たとえば大規模なものでは、四天王寺(令和5年4月・10月)・京都市勧業館(令和5年5月)・京都市下鴨神社糺ノ森(8月)・京都市百萬遍知恩寺(11月)において頭書増補節用集大全(貞享2刊)・懐玉節用集(天保元年刊)・(懐宝)早引節用集(推定吉田屋版)など一定の成果を収めることができた。節用集史の締めくくりを模索するために、節用集の後継と目される辞書群として実用辞書(昭和初期に出現した対訳外国語・ペン字書体を併記する簡易国語辞書)に注目し、その草創期の有りようを記述したものを、学会査読誌に掲載することができた。さらに『大日本永代節用無尽蔵』嘉永二(一八四九)年版の付録「本朝年代要覧」の天保15(弘化元)年5月11日に243歳の農夫が永代橋の渡り初めをしたとの記事について、当時流布していた噂話とも異なることを確認、付録記事の内実を示すかたわら、歴史学の感情史・心性史の手法の導入の必要性を示唆した。また、明治期において節用集がいかに認識されていたかを小川菊松・溝口白羊・下田歌子・(四代)竹本長門太夫・(初代)広沢当昇・石井研堂・小泉八雲らの作品に現れた節用集の記述・所感を通じて記述を試みた論考を公にできた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 佐藤貴裕	4. 巻 71-2
2. 論文標題 学習具としての近世節用集	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤貴裕	4. 巻 71-2
2. 論文標題 岡本かの子『落城後の女』における「饅頭屋本の節用集」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤貴裕	4. 巻 71-1
2. 論文標題 昭和期刊行実用辞典年表稿	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤貴裕	4. 巻 71-1
2. 論文標題 近世節用集付録研究のための覚書 日本図研究と『節用集大系』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告	6. 最初と最後の頁 322-313
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤貴裕	4. 巻 29
2. 論文標題 近世節用集付録研究のための覚書 日本図をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 書物と社会変容	6. 最初と最後の頁 113-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤貴裕	4. 巻 23
2. 論文標題 節用集終焉期の諸相 昭和期点描	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 近代語研究	6. 最初と最後の頁 317-338
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤貴裕	4. 巻 70(2)
2. 論文標題 節用集終焉期の諸相 明治期点描	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告：人文科学	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤貴裕	4. 巻 41
2. 論文標題 平成期における節用集認識 隣接分野を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語語彙史の研究	6. 最初と最後の頁 199-216
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤貴裕	4. 巻 22
2. 論文標題 節用集終焉期の諸相 大正期点描	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近代語研究	6. 最初と最後の頁 357-380
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 貴裕	4. 巻 19
2. 論文標題 昭和期刊行実用辞書の創始期	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本語の研究	6. 最初と最後の頁 205 ~ 198
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20666/nihongonokenkyu.19.2_205	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤貴裕	4. 巻 72-2
2. 論文標題 明治期における節用集認識	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告：人文科学	6. 最初と最後の頁 179-188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤貴裕	4. 巻 24
2. 論文標題 慶長六年生まれの万平は天保一五年に再建永代橋を渡り初めえたか	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 近代語研究	6. 最初と最後の頁 241-262
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 佐藤貴裕
2. 発表標題 江戸時代の出版権と節用集
3. 学会等名 江戸時代における知の商業化：出版社、編集者、印刷物の近代文化への影響（主催：ケルン大学哲学科日本学）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

近世節用集事典 <a href="https://www1.gifu-u.ac.jp/~satopy/kkn1619.htm">https://www1.gifu-u.ac.jp/~satopy/kkn1619.htm</a> 岐阜大学機関リポジトリ <a href="https://repository.lib.gifu-u.ac.jp/simple-search?query=%09%E7%AF%80%E7%94%A8%E9%9B%86%E7%B5%82%E7%84%89%E6%9C%9F%E3%81%AE%E8%AB%B8%E7%9B%B8&amp;submit=%E6%A4%9C%E7%B4%A2">https://repository.lib.gifu-u.ac.jp/simple-search?query=%09%E7%AF%80%E7%94%A8%E9%9B%86%E7%B5%82%E7%84%89%E6%9C%9F%E3%81%AE%E8%AB%B8%E7%9B%B8&amp;submit=%E6%A4%9C%E7%B4%A2</a> 近世節用集事典～特別篇：上司小剣「紫合村」～ <a href="https://www1.gifu-u.ac.jp/~satopy/kamizukasaTXTtateruby.htm">https://www1.gifu-u.ac.jp/~satopy/kamizukasaTXTtateruby.htm</a>
---

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------